

原著論文

格闘技と社会的包摶

—東京都におけるシュートボクシング道場の事例からから—

菱田 慶文*・中嶋哲也**

Combative Sports and Social Inclusion The case study of Shoot boxing dojo in Tokyo

Yoshifumi Hishida
Tetsuya Nakajima

Abstract

This is a study on the way children viewed and treated as outsiders are included socially within combative sports dojo in Tokyo. The objective of this study is to analyze and reveal how combative sport dojo embrace “os-tracized” kids such as delinquent juvenile, the bullied, and truant students, empower them and help them return to social institutions such as schools and workplaces. Previous studies show that combative sports gyms play roles of social inclusion; however, few studies are done on the process of returning to the society. The viewpoint of “social inclusion,” (from Ikemoto’s study in 2009) seems to be the only one that analyzes the people who have already been included in the society. This study focuses on children in need of social inclusion: how dojo motivation transforms them into someone who “fits” into schools or other social settings such as workplace or as professional athletes. The initial trigger for them was the desire to become strong, however this study reveals how that affects their full transformation. The methods used for this study are: instructing the kids in the dojo, doing extensive fieldwork as a resident counselor at schools in a specific region inside Tokyo from 2002 until March 2009; and as an advisor for the development of young people from then on until March 2017. The author has spent a great amount of time with the children in schools and dojo, and this has enabled him to capture the full picture of each child’s life, including their family backgrounds. A number of interviews were conducted not just with the children but also with the teachers and parents in order to prevent inevitable personal biases that arise from merely spending time with the children in one-on-one environment. In order to build a rapport with the kids, the author attended and participated in the local events such as ‘mochi-tsuki’ (pounding boiled rice into soft, gelatinous cakes), harvesting bamboo shoots, fireworks and other festivals.

There are a total of over 200 children attending the dojo in a span of 12 years, there has been a wide variety of races, cultures, and individual personalities, ranging from hyper to lethargic with each of them having their own reasons to visit the dojo. The author analyzes these personality types and notes their traits respectively within the research document. For example, children that have hyper personalities are usually the ones labeled as “delinquent” and they have a high possibility of becoming involved in violence. Children who are lethargic and labeled as disinterested or under achievers, on the other hand, were often the bullied and are generally truant students. Most of the hyper children saw the strength in combative sports as strength in physical fights, and this was the most common initial reason that they attended the dojo to begin with: They aspired for superiority in physical fights through

*四日市看護医療大学地域研究機構地域研究センター **茨城大学教育学部

training in the dojo. Their aspirations for strength were varied, ultimately boiling down to be respected and overcoming an inferiority complex, professional athletes, or simply recognized as a cultural view of masculine. Many of them displayed exhibitionistic tendencies and it was found over the span of time with them that this was due to an attraction to heroic figures, especially those of combative athletes. However, while there were several successes it should be noted that some of the “hyper” personality type children voluntarily refused to be included in the dojo and they chose to leave. The children viewed as lethargic, on the other hand, learned to be patient and to be easy-going with small trifles and not to panic and shut down. Seemingly, they were also encouraged by watching their peers become strong by training in combative sports. Some of them had even wanted to include the hyper personality children as a “guard” in their social interactions outside the dojo. When it came to actual physical confrontations or disagreements outside the dojo, they turned to them for support. This beckons to the inclusive nature found in this personality type, how it is brought out in the dojo, but also how it relates to including the hyper type personality within the sphere of trust and social inclusion. The myriad of different adolescent personality types viewed the dojo as somewhere they felt safe, and where they could envision their future and relationships with people. The dojo was a “home” or “safe haven” to the kids, which motivated them to return to their schools or social institutions. In conclusion, by observing and analyzing how “troubled kids” returned to society through combative sports dojo, with a focus on the “strength” with training over time attitude, we found that the sense of “strength” arises not only at the dojo or with physical training, but also through the interactions with their peers, instructors, supporters, etc. It is only when the children find the dojo as a safe haven and start to draw maps for their future that the “strength” through combative sports begins to manifest itself as a powerful role in education.

keywords: combative sports, social inclusion, prospects for the future

キーワード：格闘技、社会的包摶、時間展望

序 章

第1節 着想の背景

現在の日本の教育状況には、さまざまな子どもの問題がある。いじめを受けたり、不登校に陥る子どもの中には、現在の学校の教職員だけでは、対応しきれない事例も数多くあり、学校外の社会教育と連携した支援・教育が必要であることは教育学・教育社会学界ではよく指摘されてきた。たとえば、教育学者の田中雅文は、「現代の学校では、教育内容の多様化に加え、いじめ、不登校、クレーマー、学校内外の安全性のゆらぎなど教職員だけでは対応しきれない問題が増加している。そのため、地域・社会との連携による様々な支援を必要としており、とりわけ、社会教育に携わる人材や組織、団体からの支援に期待されるところが大

きい」と述べている（田中、2011, p.23）。

筆者は、2002年12月から2009年3月まで東京都のある中学校において教育相談員として勤務し、その後も2017年3月まで区の青少年健全育成アドバイザーとして、様々な少年少女と関わってきた。筆者が教育相談員として活動を始めた頃、校内暴力を行う一部の生徒に当該中学校の教職員は疲弊していた。その時、校内に相談室を設け、暴れる生徒達の相談役として、当時、格闘技の指導者として活動をしている筆者に、学校に常駐して、「彼らの相談相手にならないか」との依頼があった。こうして、学校で起きる問題の解決に協力することになった。着任後、同区内において、ボランティアで格闘技道場（以下、「道場」と略す）¹⁾を運営する地域住民にも協力することになった。

この道場は、フォーマルな学校教育とは異なり、地域住民が町道場として始め、その趣旨に賛同した人達が集まって運営しているものである。筆者は道場の師範に協力を求め、派遣先の中学校の生徒のみならず地域の子どもたちにも門戸を開き、練習を通して学校とは異なる人間関係が築けるよう努めた。

筆者は常々、格闘技には社会に役立つ何らかの教育的な効果があるのではないかと思い続けてきた。そんな時、この道場が地域と学校との橋渡しをしていることに気づき、筆者が思い続けてきた格闘技の教育的な効果はまさにこの道場の活動のなかに見出せるのではないかだろうか、と考えるようになった。この時から筆者にとって道場は、子どもたちに格闘技を教える場所であると同時に、研究のフィールドにもなっていったのである。

第2節 先行研究の検討：格闘技のエスノグラフィ研究

人は格闘技を通じていかに社会秩序を身につけるのか、という問いはスポーツ社会学の古典的な命題である。筆者の問題意識を明確にするためにも、まずはこの命題をめぐる先行研究の検討から議論を始めたい。格闘技と社会秩序というテーマの中でもアメリカのボクシングジムは事例として取り上げられる機会が他の格闘技に比べて圧倒的に多い。各時代の代表的な研究を挙げれば、Weinberg & Around (1952), Sugden (1996), Wacquant (2004=2013) などがある。彼らはアメリカのアフロアメリカンがボクシングを通じて社会といかに接点を持つのか、その在り様を描いている。

そのなかで、Sugden (1996) はアメリカのボクシングジムのみならず北アイルランドやキューバといったアメリカ以外の国のボクシングをも扱い、各国においてどういうかたちでボクシングが定着しているのか国際比較する展望を開いた。

Sugden の研究の結果、ボクシングは人種や経済格差のみならず、宗教やナショナリズム、あるいは教育制度など多様なテーマと結びついてグローバル化していることが証明されたのである。これをうけて池本 (2009) は日本のボクシングジムをフィールドワークし、ボクシングと社会階層の関係に関するエスノグラフィを作成している。また、石岡 (2012) は Sugden よりは Wacquant の視点を継承し、フィリピンのボクシングジムをフィールドワークし、ジムで獲得されるボクシングの身体文化とジムを取り巻く周辺社会がどのように関係するのかについて、エスノグラフィを仕上げている。

ところで、日本のボクシングジムは学校に馴染めなかった不良少年らを更生させ、再び学校や職場に送り返すための更生施設のようにマスメディア等で報道されることがある。しかし、日本のボクシングジムをフィールドワークした池本 (2009) はボクシングジムに通う人々は家族関係が良好な家庭で育っており、高卒の男性フリーターが多いものの仕事が無いわけではなく、Wacquant (2004=2013) が調査したアメリカのボクシングジム同様、最貧困層ではないことを明らかにした。また池本 (2009) によればボクシングジムに通う彼らは日常生活では試せない自らの身心の限界にチャレンジしていたという。そして熱いままでは空回りするアスピレーションを彼らは身心の限界を知ることで冷却した後に、労働市場でのジョブ・マッチングに成功していくのだという。つまりメディアの報道とエスノグラフィが見せる現実の間には大きな隔たりがある。

石岡 (2012) は、エスノグラフィの意義はマスメディア等が生産するボクシングの「集合神话」を打破することにあると述べている (石岡, 2012, p.41-42)。例えばそれは、フィリピンのボクサーは「感情の起伏が激しく、教養がない若者男性たちで、彼らは家庭崩壊した実家の出身であ

り、自らの腕一本で貧民街から脱出し富と名声を獲得する」(石岡, 2012, p.42) 存在であるといったような映画や小説で描かれてきたステレオタイプのことである。ごく稀にこうした集合神話を体現するボクサーもいるであろうが、ほとんどの場合、富と名声は得られず貧民街から脱出することも出来ないのである。石岡はこうした実態と向き合うためにエスノグラフィを作成することは意義があると主張するのである。池本(2009)もこのようなエスノグラフィの利点を上手く活用した研究といえる。

しかし、ボクシングのようにプロ・アマともに巨大な国際組織を有する格闘技は類をみない。従来のボクシングジムの研究がこれだけ実り豊かであったのは、ボクシングの国際的な拡がりに因っている面が大きいと考えられる。そのため、ボクシング以外の格闘技において、その格闘技を取り巻く集合神話がボクシングのそれと同じように存在するかどうかは分からぬし、貧困層とのつながりがあるのかどうかも一考に値するだろう。

この課題について、菱田(2014)はスポーツ人類学の立場からタイの格闘技であるムエタイをフィールドワークし、ムエタイを取り巻く集合神話の打破に貢献している。一般に日本の大会で見かけるムエタイ選手はKOを狙って攻撃を仕掛けしていくが、これはタイ本国では今日見ることができない。80年代ならばまだタイでもムエタイのKOシーンみたさに誰もが試合を観戦しただろう。しかし、90年代以降、多くのムエタイ選手もKOを狙いにいかなくなつたのである。なぜか。まず、80年代にタイは経済成長を始めた。その結果、タイでは中産階級が台頭し国内の経済格差が拡がつたが、その過程で彼らは低所得層とは異なる趣味を持つようになる。具体的にはムエタイから離れて海外のサッカーを衛星放送で観戦するようになったのである。一方、ムエタイは低所得層のギャンブルの対象へと変貌した。その結果、

防御主体で相手と打ち合わないスタイルに変わつたのである。この打ち合わないスタイルが確立した背景にはさらにいくつかの社会的要因がある。まず、ムエタイ選手が賭けの対象となつことから、選手の劇的なKOシーンよりも勝敗の行方を焦らしギャンブラー達を楽しませる必要性が出てきたこと、さらに選手は3週間に1度というハイペースで試合をこなさなければならないが、ケガをしてしまつてはプロモーターに次の試合で起用してもらえないこと、などが挙げられる。こうしたファイトスタイルの変容の結果、ムエタイ選手の小型化と若年化が進んだ。体格が小さければ打撃力も小さく、勝敗の行方が判断しづらくなるためである。また子どもであればファイトマネーを安くできるという理由もある。他方で、タイ最貧困地域の東北部の農村では家計を助けるために義務教育(15歳)以降は進学せず、ムエタイ選手を目指す子どもたちが増加している。こうしたプロモーターとタイ東北部の農村社会の思惑が一致したところに「ギャンブル・ムエタイ」(菱田, 2014, pp.94-95) が成立しているのである。

いさか長く菱田(2014)の研究を紹介してしまつたが、要するにボクシングほど巨大な国際スポーツではないムエタイにおいても貧困層との結びつきがみられたのである。菱田(2014)の研究を含め、ここに挙げた先行研究ではボクシングジム自体がこうした貧困層なり「各国の不利な立場」(池本, 2009, p.129) に陥っている人々の受け皿として機能し、そこで人々が何らかの社会秩序を身につけていく側面に着目しているのである。

本研究はこうした先行研究とはいさか異なるベクトルに注目している。本研究では、学校や社会に馴染めなかつた様々な子どもたちの受け皿になりつつも、再び彼/彼女を学校や社会に送り返す様子に注目しているからだ。さらに、道場では格闘技に内在する要素に社会復帰の糸口を見

出している。では、このような受け皿に留まらない道場の様子はどのような視点から把握することが出来るだろうか。

第3節 本研究の目的：社会的包摶としての格闘技

先行研究は社会とボクシングのつながりを考察する上で、近年、貧困層の研究で国際的な課題となっている社会的排除／包摶論に着目していない。社会政策学者の阿部彩は現代社会の貧困を当該国家における経済的格差だけで捉えるのではなく、社会的排除という視点からも取り上げなければならないとしている。阿部によれば、社会的排除とは人間が「労働市場から追い出され、社会の仕組みから脱落し、人間関係から遠ざかり、自尊心が失われ、徐々に社会から切り離されていくこと」（阿部、2011, p.6）である。一方、阿部は①居場所、②人間関係、③当該社会における役割といった3つの要件がそろった時、人が社会的に包摶される状況が整うといい（阿部、2011, pp.92-120）、我々が貧困問題を解決するには貧困層をいかに社会に包摶していくかが鍵となると主張する。

こうした社会的包摶論からみると、先行研究で事例となっているボクシングジムはそれ自体、貧困層の社会的包摶を担っていることに気づく。少なくともボクシングジムには経営者、指導者そして選手があり、互いに関係しながら自身の役割を全うしている。さらに、先行研究では基本的にプロ選手かプロを目指す選手が対象とされているが、彼らはプロボクシングあるいはムエタイの労働市場に強固に包摶されている。また、池本（2009）の研究はジム会員がジムからボクシング以外の労働市場へ移行していくところに論及している点で注目すべき先行研究であるが、池本が対象とした人々は社会的包摶の観点からみれば、ジムに入会する以前から以後まで既に社会的に包摶されている人々である。そのため、本研究が着目する、格

闘技を通じて人々が社会に復帰していく様子を池本（2009）は扱っていない。

これに対して、本研究の調査地の道場は1985年に創始された“シュートボクシング”という新興の格闘技を教えている。シュートボクシングもプロの大会があるため、道場にはプロの選手も在籍しているが、小中高の児童・生徒がシュートボクシングの労働市場に組み込まれるわけではない。もちろん、学校や家族関係で問題を抱える児童・生徒が集まる場所の一つとして調査地の道場が存在する以上、道場がその子どもたちの社会的包摶の場になっているとみることもできる。ただし、先にも述べたように道場は子どもたちの居場所になるだけではなく、そこから学校や社会に復帰するためのきっかけを作る場でもある。本研究が明らかにしたいのはこうした格闘技を通じた社会復帰の様子である。そこで本研究では道場が子どもたちの社会復帰をどのように促すのか、その実態を明らかにすることを目的とする。

第4節 居場所とは何か

本研究では子どもたちの社会復帰を考える上で最も重要なことは居場所であると考えている。そのため、事例に入る前に「居場所」とは、如何なるものか、考えてみる。阿部は、「居場所は、社会の中での存在が認められることを示す第一歩」（阿部、2011, p.119）と説明する。これは社会復帰の出発点を提供する場とも言い換えられるだろう。本研究が調査する道場の機能はこの居場所概念によって把握できる。しかし阿部の説明は居場所の効用を述べたものであり、居場所の概念規定としてはいささか厳密性を欠いている。そこで、本研究は教育学者の阿比留久美と田中治彦による居場所概念を参照したい。彼らは2012年に居場所に関する論文集『若者の居場所と参加』を発行しており、そこで居場所についての理論と事例を紹介している。この2人以外にも居場所の理

論的検討を行う論者はいるが、阿比留は居場所の概念化にあたっての注意点を批判的に検討しているため、また田中は同書で用いられる居場所概念の総論的に説明をしており、居場所概念の基本的な要件を論じているため参照することにした。

阿比留によれば、「『居場所』概念は、それぞれの論者がそれぞれ『居場所』を定義づけながら議論を展開しているにとどまり、理論的検討が重ねられ、概念が精緻化してきているとは言えない状況にあるのが現実」（阿比留、2012, p.45）だと指摘する。これは居場所が当事者の主観によって規定されるため、概念としての精緻化を困難にしているのである。しかし、このことは居場所の特徴も示している。なぜなら、人が居場所と感じられる空間は自宅のトイレや一人散歩で行く公園など他者との関係を前提としない場合も該当するためである。このことから阿比留は、人間関係が居場所の要件に含まれない点に注意すべきであり、むしろ居場所が確保されてこそ他者との交流が開かれる、と主張するのである（阿比留、2012, p.44）。阿部もまた社会的包摂の要件として挙げた3つの項目で人間関係を居場所とは独立させているが、このことからも居場所と人間関係は分けて考えるべきである。

次に田中は居場所を「空間」、「人間関係」、「時間展望」の三つの側面から述べている（田中、2012, p.3）。このうち人間関係は阿比留の指摘を踏まえて除外する。まず空間であるが、これは「居心地の良い空間」「安心できる空間」である（田中、2012, p.3）。田中は「教室と机という形で自分の位置が確実にあった高校生が、大学や専門学校に進学したときに『居場所がない』と感じるのはそのため」（田中、2012, p.3）というように、物理的な空間に自分自身が継続して活動できる固有の場所（教室や机）が確保されることが、安心を生み出すという。学校では学級制によって保障された私の教室や机によって“私が私である”ことは

再確認されるのである。もちろん、固有の場所は一人散歩で行く公園のように継続してそこに通うことでも居場所にしていかなければならないこともある。その確保の方法は様々であるが、ひとまず、自分自身にとって当該の空間が固有に感じられることが居場所概念における空間の意味である。

次に「時間展望」である。田中は時間展望を「自分の近未来が見えているかどうか」（田中、2012, p.4）のことだと述べる。田中はこの時間展望の重要性について明治維新以来の歴史的動態のなかで考察している。すなわち、80年代までの戦後日本は「技術立国」をスローガンとして欧米並みの産業化を目指していた。そうした時代にあっては、国家の目標も教育のねらいも明確だったため、青少年も自分自身の成長（技術や知識の習得）はそのまま職業の安定と収入につながり、日本社会の発展に貢献しているという感触を持てたという。しかし、80年代以降には欧米並みの経済発展を達成してしまったことから、国家的な目標が定まらなくなってしまった。その結果、日本社会が人々の進むべき道を示さなくなってしまったので、青少年は自ら進むべき道を自分自身で選択しなければならなくなってしまった。それはライフスタイルの多様化ともいえるが、一方で自分の選んだ進路で失敗すればそれは全て自己責任とされる。結果的に先行き不透明な現代の日本社会において、青少年は自分の成長が日本社会の発展に貢献しているという感触を持てないために近未来への展望が持ちにくい社会となってしまった。田中はこのことと「人づきあいの希薄さも加わって、どこか『居場所』がもてずにいる」（田中、2012, p.3）青少年が増えたと考察している。

本研究では日本社会といった大きな空間までは想定していないが、少なくとも道場が社会の橋渡しとなる時は、子どもたちの中に何らかの将来の目標が芽生えつつある時であることが多かつた。時間展望の持ち方は子どもによって様々では

あるものの、その中に格闘技固有と思わせる事例を発見することが出来た。詳しくは第Ⅲ章で述べるが、それは“強くなること”あるいは“強さ”である。本研究は最終的にこの格闘技を通して得られる強さが子どもたちの社会復帰にどう作用しているのかを考察することになる。本研究ではこの考察をもって、筆者の考える格闘技の教育的な効果を示すことしたい。

第5節 エスノグラフィの意義

本研究ではエスノグラフィという手法を用いる。教育社会学者の新堀道也は、「学校教育とは逆に、社会教育は施設にせよ内容にせよ参加者にせよ、完全に多様であり柔軟性に富む」(新堀、1981, p.16) と述べているが、道場の営みもまたこの指摘に妥当する。そもそも格闘技ジムにおける指導法やジムの成員同士の関係などは各ジムによって様々である。そのため、格闘技ジムによる社会的包摶の在り様を知るには、各ジムをフィールドワークするしかない。格闘技ジムの実態を踏まえた上で、当該のジムではどのような社会的包摶がなされているのか、その要点を示すことが格闘技と社会的包摶の研究の起点になると考えられるのである。

本研究では、筆者自身、調査対象者になる子どもたちや、調査地の道場の支援者と共に過ごし、コミュニケーションをとる、長期のフィールドワークを行った。道場の練習だけでなく、練習後も、何度も銭湯に子ども達や支援者と出かけ、レクリエーションと一緒にすることで、ラポール関係を結んだ(桜井、2002, p.63)。また、子どもから得られない情報は、可能な限り、子どもたちの親や彼らの通う学校の教師にも聞き取り調査を行った。情報が偏らないことを心がけ、様々な角度から子どもたちのライフヒストリー及び練習の様子を抽出することを試みたのである。

なお特に脚注がないものは、発話のカギ括弧

を含め筆者の参与観察で知り得た情報である。本文中に登場する人物のライフヒストリーの中心は、小・中学生から高校生のものまであり、教育学的には学校種によって児童・生徒と呼び分ける必要がある。しかし、本研究ではこれ以降、論述が煩雑になることを防ぐため、一括して子どもあるいは子どもたちと表記する。また、デリケートな問題や個人情報を多く含むため、筆者と出会った当時の年齢だけを記載し、現在の年齢は記載しないこととする。

第1章 格闘技道場の学びの特徴

第1節 道場の開設

道場は、高度経済成長時には、多くの日雇い労働者が居住していた地域に隣接した場所にある。また、生活保護受給率も高い地域に隣接している為、アパートなどの家賃も低価格な地域である。通ってくる子どもたちもこの地域に住んでおり、家庭が「相対的貧困」²⁾であるケースが多い。

道場がメインにしている格闘技は、先述したシュートボクシングという格闘技である。この格闘技の特徴は、ホームページで以下のように紹介されている。

「シュートボクシングは、巷に溢れている一過性かつ話題づくりのショー（格闘技の興行）ではなく、また喧嘩の延長ではなく、妥協なき真剣勝負を行うスポーツです。練習や試合で学べる礼節、シュートボクシングを通して得られる身体的な強さ、そして鍛えられる健全な精神を、選手のみならず、青少年少女や非行少年、不登校児など、多くの人々へ伝えていくことを目標に掲げております」³⁾

道場の師範は、都内で接骨院を営む元プロ格闘家である⁴⁾。師範は両親がなく育ったという。素行が良くなかったため、中学時代に野球部を退

部した時に、柔道部の顧問に柔道を勧められた。師範と格闘技の出会いは、この時であったという。師範は、この柔道部の顧問を「自分の人生を変えてくれた恩人である」と常々、子ども達に語っていた。高校卒業後、プロ格闘家の道に進み引退したが、引退後は格闘技経験を活かせる柔道整復師の道を選び、32歳で開業した。

道場は2002年4月に開設された。当初は接骨院内にマットを引いて練習したという。道場開設当時、接骨院周辺では、校内暴力や喫煙など、非行を繰り返す中学生が地域の問題となっていた。他方、この中学生たちは格闘技に大変興味を持っていた。2002年当時はK-1やPRIDEといった格闘技イベントがテレビ放映され、大流行していたのである。そうしたなか、師範は中学生たちの求めに応じる形で、終業後の接骨院の一部を使って格闘技を教えはじめたのである。道場は無料であり、誰でも道場の門をくぐることが許されている。

やがて師範の活動に共感した元プロ選手や経験者が指導員として集まってきて、彼らも無料で指導を受けた。その中の一人として筆者も指導に協力することになったのである。筆者は、学校での問題児の行動やいじめ被害者、不登校児の事情を道場関係者に話し、問題行動の更生やいじめ等を克服できるように、協力を求めた。また、子どもが属する学校側に対しても、道場での行動や会話などから、学校では得ることのできなかつた家庭内の事情や、子どもを取り巻く状況においても直ちに、情報を共有した。

師範は青少年育成の実績を評価され、地区的教育委員会から廃校になった中学校の一部を借り受け、そこを道場として運営することになった⁵⁾。この時期になると、非行に走る子ども以外にも学校で孤立する子どもも入門するようになつた。こうして道場には様々な問題を抱える子どもが通うことになったが、師範は彼らを受け入れ

れ、多様な子どもたちが互いにコミュニケーションができるよう心掛けた。道場では、小学校低学年から40代の社会人まで幅広い、約12年間でのべ200人以上が訪れている。その後、師範の活動は公益財団法人社会貢献支援財団から認められ、2015年11月に社会貢献賞を受賞している⁶⁾。

第2節 練習メニュー

ここでは日々の練習内容について述べる。練習は、午後八時から始まる。最初の40分は、子どもから大人まで行う基礎トレーニングに時間をかける。基礎トレーニングとは、腕立て伏せやスクワット、腹筋のような自身の体重を利用した自重トレーニングの事である。師範によれば、これは、子どもの頃から始めると、「自然にバランスがよくなり、強くて壊れない身体作りにつながる」と言う。次に体幹を鍛える為のアイソメトリック的な姿勢や足上げ腹筋、ネックブリッジ行われる。基礎トレーニングは、子どもにとつても既にプロになった選手にも、重要な基礎を作り上げるトレーニングである。まったく器具などは使わないが、身体には、大人も子ども負担をかけるので、身体が慣れるまで、根気よく忍耐を持ってトレーニングに臨まねばならない。師範によれば、「この基礎トレーニングを正しいフォームで逃げずにやると、子どもの身体も変わるし、心の強さも変わる」と言うのである。

以下にトレーニングメニューを挙げる。

- ・ヒンズースクワット 50×3
- ・ジャンピングスクワット 50×2
- ・エンジン 1分（両手を前に伸ばし、膝を45度に曲げ、踵を浮かせる姿勢を1分間）
- ・バービー 30×2
- ・足上げ腹筋 1分×3（床に寝て膝を伸ばした状態で床から30度の角度で足を上げる）
- ・ミニプッシュアップ 100×3（拳を握り、

10 センチだけ上下に動かす腕立て伏せ)

- フロントブリッジ 1分
- ハイブリッジ 1分

基礎トレーニングは、師範の号令に合わせて全員でやるのだが、これだけで参加する子ども達の性格や格闘技の能力がほぼ分かってしまう。ある子どもは最初から「如何に楽にこなすか」を考えて行動し、ある子どもはじわじわと「苦しさに耐える根気」を身につけていく。

基礎トレーニングでは、身体の大きな子どもよりも身体が小さい子どもの方が、「頑張り」を見せやすい。身体の大きな子どもは、パンチを打ってもキックをしても重量があるだけに重たい攻撃ができるのだが、基礎トレーニングでは自身の体重が負担となり、練習当初はなかなかメニューについていけない。他方で、このような基礎トレーニングは、小さな身体の子どもの方が早く順応する。師範や指導員達はこうしたトレーニングの特性を利用しておらず、身体が小さくていじめられがちな子どもにこそ、「君の根性はすごい」と常に声をかけ褒めている。それによって身体の小さい子どもに自尊心を植え付けるのである。対する大きな子どもにも「粘り強さ」で負けないように、「基礎トレーニングは、やればやるほど強くなるぞ」と声をかけ、将来的に身体の大きな自分も有望である、との期待を持たせている。

次に、実戦練習である。この道場では基礎トレーニング以外では、一斉教授的な指導方法はしない。子ども達は、それぞれにグローブとすね当てを付けて、身体の大きな大人と実戦練習に入る。ここでは、プロ選手及びアマチュア選手は、子どもに思いきりパンチやキックを打たせる。自分の身体をどんどん殴らせ蹴らせるのである。子ども達は、大人の胸をかりて、パンチやキックを繰り出すのであるが、鍛えている大人にはびくともしないことが分かるようである。この練習で子ども

に大人の強さを感じさせることで大人の言う事を聞く雰囲気を作っていくのである。加えて大人は子どもの攻撃を受けてあげるだけなので、子どもに大人の優しさを感じさせる所がこの練習の長所である。一方、プロ選手や大人にとどめ、自分の身体を打たせる事はそれだけで腹筋その他の筋肉を一瞬で収縮させ、鍛えることにつながっているのである。実戦練習が終わると、子どもは帰り支度をするが、中には家に帰っても仕事等で親がない場合もある。こうした子どもは中学生になると、大人の部（選手コース）を見学したり、参加したりする。

練習メニューを以下に記述する。

- 繩跳び 3分×3～6
- シャドーボクシング 3分×3（相手を想定して、相手を打ったり蹴ったりする練習）
- マスボクシング 3分×2～3（相手を本気で打ちこまない程度のボクシング）
- マススパーリング 3分×5～10（上記と同様のキックボクシング）
- スパーリング 3分×2～3（相手に対して本気で打ち込むキックボクシング）
- ミットトレーニング 3分×3～5（トレーナーが持つミットを全力で打ち込む練習）
- サンドバック 3分×5～10（砂や布が入ったバッグを全力で打つ練習）
- 補強トレーニング（ウェイトトレーニング等）
- ストレッチ で終了

上記に挙げたのは大人の選手が行う一般的な練習メニューであるが、実際は、選手のレベルによっても、試合までのスケジュールによっても変化する。試合の3週間前には、より強度の高い練習を行い、試合直前にはスパーリングなどのケガのリスクの高い練習については強度を抑えられる。師範はこうした大人の激しい練習を子どもが目の

当たりにすることを積極的に奨励している。師範は「試合に勝ちたければ、強くなりたければ、苦しい練習から逃げてはならない」ことを常々、述べていた。それによって子どもたちに「普段、大人と同じ強さになるには、ああいう練習をこなさなければならない」という具体的な目標を持たせることが練習を継続するモチベーションになるのである。

第3節 指導方法

では、道場ではどのように指導がなされているのか。本節ではこの点について考えてみたい。まず、道場の指導において学校教育における教員一児童・生徒のような教育の授受関係は固定されていない。これにはいくつか理由がある。まず、道場開設当初は師範一人で指導が行き届いたが、入門者が増えるにつれて全ての入門者に稽古をつけることが難しくなっていったことである。次に、ボランティアで集まった指導員達は、全員、他に職業を持っており、それぞれが時間のある時に指導員にかけつけているのである。そのため、子どもたちは師範やボランティアの指導員から指導を受けられないこともある。現在はプロ選手や上級経験者は、自身も試合に出場するため、優先的に師範その他の指導陣から指導を受けている。こうした状況のなかでいつしか道場では、「年長者が年少者に教える」という方式が採られるようになった。プロ選手は高校生に、高校生は中学生に、中学生は小学生に技を教えるというシステムである。このような縦割り指導は、結果的に稽古に参加する子どもにも指導員の役割を担わせることになる。それにより年長者は年少者の競技力に対して責任感を持つようになる。また、指導する側に回ることで自身が身につけている動きを反省し、言語化するようになる。それによって、年長者自身も自らの動きを反省することにつながり、結果的に競技力向上にもプラスに働くのである。これ

は学校教育の制度上、学年毎に分割され、授業を受ける側に固定される学校ではなかなか経験できないことである⁷⁾。

もう1つ指導方法で特筆すべき所は、「個性を優先する」ということである。先にも述べたように、空手道の道場でよく見られるような、指導員の号令に合わせて道場生が一齊に動く一齊教授は行われない。パンチの打ち方、蹴りの出し方も、道場内で統一されたフォームがあるわけではなく、コーチにより教え方が異なる。また、子どもたちを無理に試合に出すこともなければ、無理にスパarring⁸⁾させることもない。師範はあくまで「強くなりたい分だけ、自分で努力しなさい」という方針をとっており、無理強いしない主義を取っている。師範は、格闘技はやりたくないが、友達の応援だけはしたい、という子どもも受け入れている。道場のために、何か役に立ち、自分の役割を果たせば、道場の仲間として迎え入れるのである。

第4節 礼法の位置づけ

道場では、伝統的な武道と比較して礼法については自由度が高いのが特徴である。礼法も他の武道や格闘技の道場などで行われているような形式的な作法は求められない。例えば、この道場では練習の初めと終わりに黙想や師範への礼を行うことはない。その理由を師範は、次のように述べる。

礼儀作法の押し付けは、子どもを従順にしようとしているだけで必要ない。子どもが、もつと教えて貰いたいと思えば、自然に「お願いします」「ありがとうございます」と言うのであって、子どもから指導員に敬意を払いたいという気持ちになるまで、指導員から礼を求めない

このような指導方針は、学校嫌いの一部の子どもには、受け入れやすい指導法であった。道場

に来ている子ども達の中には、一般に学校教育で行われているような一斉に「起立」し「礼」をするという作法を嫌うケースも見られるからである。これを師範は「遊びの延長で礼儀作法を学ぶ」考え方だと述べている。道場には、大人を信頼できない子どもも多く訪れている。そうした子どもの考える大人の中には学校教員も含まれている場合が多い。そのため、「どんな子どもでも遊んでやれば心を開く」という師範の信念の下に、各指導員は子どもと接するよう心掛けている。

このように調査した道場は礼法に厳しくない一方で、道場に通う子どもたちには守らなければならぬ規則を課している。それは、「道場の名前を汚さない」「弱い者いじめをしない」の2つである。後者については、特に説明は不要と考えられるが前者については説明したい。1つ目の規則には、「常識を守れ」と戒めているのと、「世間の目を気にしなさい」という事が含まれている。道場には、いじめられっ子や非行少年もたくさん来ていたが、師範は「常識と世間体がどうでもよくなつた奴は、誰からも相手にされない」と常々話していた。「あの子は非行少年／少女である」と学校でレッテルを貼られると、なかなかそうした周囲の評価から脱却することは難しい。子どもたちはそうした周囲の評価に対して開き直って非行を繰り返すのである。また、道場に来る非行少年は、概ね格闘技が好きであったが、タバコを吸っていたり些細なことで喧嘩を起こしたりすることが多かつた。その場合、道場の師範や指導者らは「バカに刃物を持たせている」と地域住民に言われ、社会的信用を失いかねない。そのため、師範や指導者達は子どもたちに常識的な振る舞いをするよう常々注意していたのである。加えて、プロ選手や成人した男性もモラルを徹底的に注意されていて。強い選手やプロ選手がタバコを吸つたりすると、彼らに憧れる子どもは真似をしてしまうからである。

師範や指導者は、生活保護を受けている子どもや貧しい子どもには、自分の洋服や友人から貰い受けた洋服を子ども達にプレゼントしていた。「他の人には内緒だぞ」と言いながら。これは世間の目に対する師範や指導者の配慮といえる。子どもたちは貧しい上に身なりがみつともないと、人からバカにされてしまうからである。

これら2つの規則が守られない場合、子どもたちはどうなるか。道場では破門や出入り禁止になることはない。子どもの居場所を奪ってしまうことになるからである。規則を破った場合、師範に厳しく叱られ、罰として練習をさせてもらはず、ひたすら道場の掃除だけして帰らされる子どもも幾度か見られた。ただし、規則を破った子どもへの叱咤や罰は常に行われるのではなく、子どもの様子を見て柔軟に行っているようであった。これについては次節で検討しよう。

第5節 叱り方—綱渡りの信頼関係—

この道場では、態度の悪い子どもを大声で叱る場合もあるが、厳しい指導をする際、すべての子どもに同じようにするのではない。師範は、指導には個別性が必要であるという。分かりやすく言うと、自分のため叱ってくれた、と理解できる子どもには、遠慮なく大声で叱ると言うのである。これは、子どもと師範の距離感や信頼関係の度合い、道場への愛着が重要になってくるのである。逆に、厳しい言葉で指導して、潰れてしまうような可能性がある子どもには、「個別に呼んで、分かるように諭す」と言うのである。師範によれば、「学校で暴れ放題の子どもほど、プライドが高く、大勢の前で叱った場合、恥を搔かされたかのように感じてしまい、道場に来なくなってしまう」という。このように、それぞれの子どもの特性を理解し、個別性を大切にすることが重要なのである。

新堀は「社会教育は学校教育の如く強制的ではなく、それへの参加はまったく個人の自由意思、

自発性による」(新堀, 1981, p.16) と述べている。このような道場には、フォーマルな学校教育のように、どうしても通わなければならないような義務もなく、子どもたちは、行きたくなければ行く必要がないのである。子どもたちは、自らがそこに行くことを選択し、居場所として選んでいる。しかし、叱り方一つで師範や指導員と子どもたちの信頼関係は崩れてしまい、道場は居場所でなくなってしまうのである。そのため師範や指導員が、子どもに対して、時に厳しくも柔軟で適切な指導を行うことで、子どもたちと師範や指導員の信頼関係はその都度、構築されるのである。

第6節 地域住民とのつながり

最も熱心な支援者は、地元の人々である。他者とのつながりは社会的包摶の要素の1つであるが、調査地の道場においてそれは道場内の人間関係に留まっていない。たとえば、既に亡くなってしまったが、地元の鳶の親方であるA氏（当時53歳）⁹⁾は、道場のイベントを積極的に支援していた。A氏は、「子どもの頃から「妾の子」とバカにされ、小学校時代には、野球をやってもグローブを持ってなかつたのは、自分だけだった」と、貧しかった時の思い出を時折、語っていた。そのため、A氏自身、子どもの頃は孤独で一時期は、「不良少年」と呼ばれたこともあったと言う。A氏自身、社会的排除を経験していたのである。A氏は、「若い頃は、喧嘩などで、警察に厄介になつたことも何度もあった」と反省を常々語っていた。A氏は、中学卒業後、鳶職に弟子入りし、成人後に親方として建築業を営んでいる。

そんなA氏は、道場の師範らの子ども達を面倒見する姿勢を尊敬し、支援するようになっていた。選手が試合に出ることになれば、乗用車を用意し、選手や応援団の運搬までを援助していた。A氏は、金銭的な援助や物品の援助だけでなく、道場に通う子どもが高校進学をしなかつたり、高

校を退学した場合は、自分の経営する建築会社に就職させたり、仕事を斡旋したりと様々な支援をしていた。A氏は、「家が貧しいといじめられるから、ケンカが強くないと生きていけない」、「どんな子どもでも孤独にしてはならない」と幾度となく我々に語っていた。犯罪に手を染めたり、非行に走ったりする子どもの根本的な原因は、孤独にあると何度も話していた。そのような理由でA氏は、道場を様々な形でサポートするようになつたのである。社会的排除の経験者であることがA氏を支援に向かわせたのである。

他方で、A氏は社会的包摶も経験していたと考えられる。レイブ&ウェンガー（1991=1993）が主張するように、新参者は徒弟制という実践コミュニティに参与するなかで、「いつか親方のようになりたい」という目標を持ち、熟練のアイデンティティを獲得していくことになる。この過程で新参者は当該実践コミュニティへの参与の度合いを強め、そこでの人間関係に包摶されていくことになる。A氏も建設業の親方にまで大成していることから、鳶職という実践コミュニティの中核にまで参与していったものと考えられる。しかしA氏にとって鳶職への参与は、そこが単なる仕事場ということを越えて居場所になっていたのではないだろうか。A氏が道場に通う子どもに自身の経営する建設会社へ就職させようとしていたのは、そこが子どもたちにとって居場所になり得ると身をもって知っていたからだと考えられる。

ところで、支援者はその他の支援者を呼び込むことがある。例えば、A氏が「兄貴」と慕っていたB氏（57歳）とA氏の経済的なサポートをしていた社長C氏（40歳）があげられる。B氏は、地元でとんかつ店を営んでいる。B氏は、区内で20年以上も少年野球チームを率いている。B氏は、A氏が亡くなった後、A氏の意思を継いで、道場の支援をするようになった。選手らが店に来ると大サービスで料理を振る舞うだけではなく、少

年野球チームのOBを連れて試合観戦にやってくる。一方、社長であるC氏は、健康センターなどの経営をしており、経済的な成功者である。C氏もA氏の考え方である、「子どもを孤独にしてはならない」との考えに賛同し、A氏の意思を受け継ぐ形で道場を支援しているのである。道場もこうした支援者に助けられて成り立っているが、A氏のような理解者が他の格闘技ジムでも現れるかどうかは偶然に任せるとかねない。ただ、道場の師範や指導員らにしてみても、子どもたちの次の居場所を用意してくれるA氏は頼れる存在だった。このような居場所の連鎖が生まれることも子どもの社会的包摶には必要だと考えられる。

第7節 子どもによるボランティア活動

道場が所属するシュートボクシングの団体は、社会貢献活動団体を宣言し、プロ選手の育成だけでなく、社会貢献活動が重要であると訴えている¹⁰⁾。その一環として、格闘技のイベントだけでなく、たけのこほり、花火大会、餅つき大会、農業体験活動などを行っている。また、東日本大震災の際には、救援活動や炊き出しなどの活動をしている。

創始者のシーザー武志氏はボランティア活動への参加について、選手やトレーナーだけでなく、より多くの人々の絆を再確認するためにも重要である、と語っている。教育学者の笹井は、「ボランティア活動は、結果として、活動者自身の成長発達として、豊かな社会づくりに貢献するものである」(笹井,2011,p.13)と述べている。このように、道場が所属する団体には、たびたび子どもから大人までが一堂に集い、一緒にコミュニケーションをとっている場面が多々見られるのである。子どもたちはボランティア活動を通じて道場以外の社会に参与することができ、また社会に貢献したという自負を手にすることが出来るのである。

第8節 道場内のコミュニケーション

筆者の参与観察中、練習後に師範が子どもたちよりも先に帰ることはなかった。道場の練習を終えると、子どもたちと師範は、ジュースを飲みながらおしゃべりを始める。話の内容は、学校の事や仕事のことなど様々である。分かりやすく言えば、家族の「団欒」のようである。この団欒に、師範や指導員は、一緒になって参加する。これが子どもの個性を理解し、子どもたちとの絆を創る機会になっている。

道場の指導員や支援者が様々な職業であるのは上記で述べたが、それ以外の一般会員も様々な職業や個性を持ち、子どもたちと関わっている。この場では、大人が子どもに語りかけている場面や子どもが大人に相談している場面を度々、目にする。大人が自らの人生経験を語ったり、子どもが学校での出来事を大人に話しているのである。このおしゃべりの時間が好きで道場にやってくる子どもも多かった。話を聞いてくれる人が多いという点も、安心できる空間を築いていると言えるだろう。

このように、道場では社会的包摶を達成するための実践が随所に見られた。それらの実践は体系的に行われているというよりは偶然が重なったり、子どもの状況に応じて師範や指導員の対応が変化していくなかで生起するものであった。ただし、ここに挙げた道場の特徴に共通しているのは、師範や指導員といった大人が子どもの自尊心や子どもとの人間関係を損ねないように配慮している点であろう。阿部の主張に従えば、社会的排除が起きるのは自尊心が傷つき人間関係から切り離されるときである。そうしたことが起きないよう子どもに配慮する大人の姿が窺えたのである。

ところで、このような道場の諸実践から見出される社会的包摶の在り様は別段、新奇なものではないように思われる。中には自重トレーニングの特徴を活かした社会的包摶もみられたが、それ

も格闘技の道場ならではの社会的包摶とは言い難いのである。これは他のスポーツでもあり得るからだ。では、格闘技ならではの社会的包摶の仕方とは何か。それは第Ⅰ章でもふれたように“強さ”である。次章ではこの“強さ”について子どもたちがどのように捉えているかを考察し，“強さ”が子どもたちの社会的包摶をどう果たしているのかを検討したい。

第2章 子どもたちにとって“強さ”とは何か？

子どもたちにとって“強さ”とは何か。これに唯一の回答を与えることは難しい。子どもによって様々な意味が託されるからである。ここでは、彼／彼女らの聞き取りを通して得られた“強さ”的意味の重層性を探りたい。すなわち、クリフォード・ギアーツのいう「厚い記述」（ギアーツ, 1973=1987）によって道場での“強さ”的意味を様々な文脈の重なりの上で浮彫にするのである。この道場には、様々な子どもたちが集まるが、次の2つのタイプに分けられるように、筆者には思われる。それに従って分析を進める。

第1節 気性の荒い子どもたち

ここでは、7人の事例を挙げて紹介したい。年齢は、その当時のものである。

① 17歳のEは一番弟子である。当時、彼は区外から自転車で通つて来ていた。父親はなく、母親に育てられたと語っている。小学校時代にとにかくヒステリーをおこし、子どもどうしで喧嘩になると、相手に馬乗りになって殴りかかるほど暴れる子どもだったという。中学生になった時、接骨院を営む師範に治療を通して出会うことになる。彼は、毎日、道場にいるのが日課で学校が終わるとすぐ練習に訪れ、閉館まで道場で過ごした。彼は学校には「あまり友達がない」とよく言っていた。中学校及び高校の部活動にも入らず、学校

が終わると真っ直ぐ道場にやってくる。道場の居心地がよかつたというのである。

彼は頑固な性格で、手を抜いたトレーニングができるほど、要領のよい人間ではなかった。そのような性格であるために、自分の納得のいかないことに関しては、周囲の大人に対しても徹底的に疑問を投げかける場面が見られた。当時の彼は、ひたすらプロ選手を目指して、トレーニングをしていたが、練習で頸部を傷めた為、プロ選手の道を断念した。彼は、ケガの経験から医療人として生きる道に方向転換し、現在は看護師をしている。彼は、13歳から22歳まで在籍、現在は支援者として時折、道場や試合会場に顔を出している。道場で彼は強くなろうとしていたが、それは具体的にはプロ選手になることだった。強くなることがプロ選手という進路への橋渡しを促す役割を果たしていたのである。

② 10歳のFの第一印象は、みすぼらしい子どもであった。身体も同世代の子どもより一回り小さかった。道場に通い始めた理由は「練習に行くと、ジュースがもらえたり、お菓子がもらえるから」だという。師範によると、学校で暴れたり、時には弱い同級生をいじめたりすることもあり、そのいじめた子どもの父親が道場に怒鳴り込んで来たこともあったという。Fは5人兄弟で、父親はなく母親が深夜遅くまで働いたので、家庭は経済的に余裕がないようにみえた。彼は、中学1年生の時、家庭の状況に嫌気がさし、家出をして隅田川周辺にいたホームレスの男性に救われた経験を持っている。中学時代、修学旅行に行く積立金を親が払っていなかつたのが、発覚し、修学旅行に行けない事が分かり、道場の大人のカンパで修学旅行を行つたというエピソードがある。道場は、彼にとって、社会的包摶を受けられる人間関係のある居場所であった。

中学卒業後、定時制高校に進学・卒業し、ア

ルバイトをしながらシュートボクシングを続け、プロとして活躍した時期もあった。彼の試合や経験などは、テレビや新聞などのメディアにも取りあげられている¹¹⁾。プロ選手としてランキングにも名を連ねたこともあったが、現在は、土木工事現場で働いている。彼にとっての道場は、強くなれる場所だけでなく、スター選手として脚光を浴びる可能性を秘めた場所であった。Fにとって強くなることは実際にプロ選手として活躍できる場に進むことであった。

③ 15歳のGは、中学3年生の4月に区内に転校してきた。彼の母親によると、母親は、父親とは離婚し、4人の子どもを一人で育てているという。彼は、高校進学をせず、中学を卒業したら、すぐに働くつもりであると筆者に話したことがある。理由は、勉強嫌いなのと、家計が大変であるからである。

彼はこうした家庭事情と学校の勉強についていけないことにコンプレックスがあり、転校当初は周囲の生徒に「なめられたくない」と言って、不良行為を繰り返していた。例えば、登下校時に喫煙するなどして、周囲に威圧感を出していた。学校には、給食を食べにくる程度で、半不登校という状態であった。時には、体育教師と乱闘になり、母親が学校に呼び出されることもあったという。格闘技に興味を持っていた彼は、道場に見学に来た際に入門を申し込むことになるが、自転車を持っていなかった為、歩いて道場に通っていた。その事情を知った道場の師範から自転車を貰うと、休まず道場に来るようになった。彼は、アマチュア大会に出場し、さらに練習に没頭することになる。その頃から、周囲から「根性のある奴」と言うように言われはじめた。また、道場の師範から、「勉強なんかできなくても、しっかり、掃除と挨拶ができる奴になんかきや、世の中で通用しねえ」と言わされたのが、彼に大きな影響を与えた。

たようだ、生活習慣の改善が見られるようになつた。こうして道場に通っているうち、いつしか学校でも不良行為はしなくなつたようである。彼は、15歳から18歳まで在籍し、現在は、内装業の職人として働いている。彼にとって強さとは、クラスメートから軽んじて見られなくなることであった。学校の勉強は、相変わらず苦手であったが、卒業後は、「鳶職人として生きていく覚悟である」と語っていた。

④ 14歳のHは、道場が軌道に乗った頃に入門してきた。父親はおらず母子家庭であった。彼は、学校で目立つ子どもとして有名であった。当時の中学校の担任の先生によれば、目立ちたがり屋で授業中に騒いだり、私語が多かった。Hの中学生時代の担任によれば、彼はクラスの明るいムードメーカーになる反面、粗暴な面も多々見られたと言う。彼は、修学旅行前に喧嘩沙汰を起こし、修学旅行に参加できないこともあった。彼の入門の動機は強くなることだったが、師範を「父親のように」慕っていたという。彼は道場で練習するうちに、学校での粗暴な振る舞いも止んでいったようである。中学卒業後は定時制高校に通いアルバイトをしながらプロ選手となつたが、20代前半で引退、現在は、運送業に従事している。彼にとって強くなることはプロ選手になることにつながっていたが、それだけでなく強さへの憧れは師範への憧れでもあった。彼は、学校で問題行動を起こして、先生に叱られても全く改めようとしなかつたが、その問題行動を師範に告げ口されるのを畏っていた。彼は師範に見離されたくないかったのである。その為、学校での態度を真面目に見せたがっていた。Hにとって師範は、嫌われたくない、憧れの存在だったのである。彼にとって強くなることは師範の人格に近づくことだったと考えられる。

⑤ 17歳のIの筆者の第一印象は、男子なのか女子なのか分からなかったというものである。彼女は、女子選手として、既に格闘技歴があり、実力ある若手選手として期待されていた。彼女は、母親がなく父親に育てられた。彼女に何故、格闘技を始めたのかを問うと、「自分はとにかく暴れてしまう性格だった」と話した。中学時代に些細なことで同級生の女の子を殴ってしまった。彼女によると中学を数回転校し、最後には施設に預けられ、そこでも暴力行為が続き、施設にも居られなくなってしまった。彼女は、中学校の卒業証書を受け取らないまま、現在まで来てしまったと言う。中学校も高校も行こうとしなかった彼女にとって、強さとは、「周囲に認められること」、「人並みに、一人前になることだ」と語っていた。また彼女は、「プロ選手で活躍することが中学の卒業みたいなものですよ」と度々、語っていた。彼女にとって格闘技のプロになることは、社会から人として認知されることだった。彼女は、17歳から20歳まで在籍、現在は道場を離れ、解体業者として働いている。その仕事を生業にしている理由を彼女は、「女っぽい仕事はしたくない」と言った。加えて、「男でも逃げ出すきつい現場が自分にあってる」と語った。彼女にとって、格闘技も仕事も、自分の男らしさを表現する手段であった。また、それを平然とこなすことが、彼女の内で一人前になることだった。

⑥ 14歳のJは、乱暴な子どもであった。彼は、中学時代から暴走族に入っていたり、当時の同級生達によれば「目立ちたがり屋で、暴れん坊。彼がいると授業が成り立たない」「喧嘩は日常茶飯事だった」という。彼は、喧嘩が強くなりたくて、道場にやってきた。道場は、彼にとって学校のように煩わしい規則はなく、喧嘩の腕も磨ける強くなれる場所であった。彼は、14歳から成人前後まで、時折、道場に顔を出していたが、現在の状

況は不明である。彼は、「格闘技はケンカに強くなるための修行」と言っていたが、師範は破門をしない主義であったため、師範や指導員は彼を何度も諭した。強さの意味の軌道修正をしようとした。しかし彼は行動を改める事がなかった。道場に居場所がないことを感じた彼は、自ら道場に来なくなってしまったようである。彼にとって強くなることはケンカに強くなることを指していた。彼は、道場にきていても更生しなかった例であった、と道場の師範や関係者は捉えている。このように強さは必ずしも社会的包摶に結びつかず、子どもの意味の捉え方によっては逆に社会的排除につながる恐れもあるのである。

⑦ 17歳のKは、地元では荒っぽい子どもとして知られていた。中学生の時の担任によれば、熱い男の子でもあったが、荒っぽい面がたくさんあつたという。彼自身も、中学、高校時代から喧嘩ばかりして、高校卒業後には「警察沙汰になるほどの喧嘩をしたことがある」と語っている。彼の喧嘩や祭礼での乱闘のエピソードは、地元では有名である。彼もJ同様、喧嘩の強さを磨くために道場に入門していたのである。KもJも不良少年である、と道場で認識されていたが、Kは、粗暴な相手には喧嘩をするが、眞面目な生徒には差別なく紳士的に接する少年であった。彼は、道場の師範から「弱い者と喧嘩したら男の値打ちが下がる」という教えに感化されたのである。そのため、彼にとって、格闘技とは喧嘩の腕前を磨くための手段であったが、同時に不良仲間の間で“男を上げる”手段でもあった。筆者が見る限り年少者への面倒見がよく、近隣の子どもからは、兄貴分のように慕われていた。当時、中学生だった子どもたちの多くは彼に憧れていた。現在、彼は、都内で会社を経営し、祭礼や地域の防災活動ではリーダー的な存在として活躍し、道場の支援をしている。17歳から21歳まで在籍した。Kにとって強くな

ることは喧嘩で強くなる事を意味していたが、同時に「男の値打ち」を上げることをも意味していたのである。

①～⑦の事例から、気性の荒い子どもたちは、その気性の強さも反映してか、練習当初は格闘技を習うことで、喧嘩に役に立てたいという気持ちが先行していたように見られる。特に、気性の荒い子どもの中でも生活保護を受けたり、貧しい家庭の子は、前述した親方A氏の言葉にあるように「ケンカが強くないと生きていけない、不良になりやすい」という部分は、共通しているように思われる。また、この道場でのプロ選手らとの交友関係は、彼、彼女らにとって、誇りにもなり、強くなる為の知恵（練習方法、振る舞い、生活）を知っている身近な見本になっている。これらをまとめると、気性の荒い彼らにとって、道場はまず格闘技で強くなるための「居心地の良い空間」であった。なおかつ練習を通じてそれが思い描く強さに向けて「時間展望」が持てる場所でもあったと言える。そして、その彼、彼女らが思い描く強さには、「格闘技が強くなること」、「喧嘩が強くなること」、「男らしくなること」、「周囲に認められること」、「人並みになること」、「憧れの存在のようになること」といった意味が込められていたのである。

第2節 気性の大人しい子どもたち

道場には、気性の荒っぽい子どもばかりが入門してきたのではない。気性がおとなしく目立たないが、学校でいじめられている子どもや不登校児も多々、道場に入門してきた。本項では、6人の事例を挙げて紹介したい。

① 17歳のIは、師範によると、大人しい性格でクラスメートにもいじめられていたという。初めて道場を訪れた時は、母親と一緒にいた。筆者の

第一印象は、やせ細って暗い子というものであった。当時の彼は、強さに憧れてはいるものの臆病で、試合中に泣き顔になってしまふこともしばしばあった。印象からすると、とてもプロ選手になるほど成長するとは、誰も思っていなかった。しかし、大人しいながらも努力は人の倍以上も積み重ねる子どもであった。野球などのスポーツをやらせても不器用で、決して運動のセンスがよい訳ではないが、練習のメニューに挙げた基礎トレーニングでは他の誰よりも手を抜かず、努力を積み重ねる子どもであった。そのうち体格がガッシリとしてきて、いじめられることもなくなつていったという。基礎体力が常人以上になり、大学時代にはめきめきと頭角を現し、地味でありながらもプロライセンスを取得することになる。いじめられっこからプロ選手にまで成長した例である。現在は引退し、消防士として働きながら、道場の子どもたちを指導している。彼にとって、格闘技で強くなることは、体力・体格を向上させていじめられなくなることであり、子どもたちからの尊敬を集めることであった。それによって、安心して学校生活もできるようになったのである。

② 15歳のMは、私立の中学校に通っていた。その中学校は、不良っぽい生徒もいなければ、授業中におしゃべりする生徒もいない、進学だけを目標にしているような学校であったと言う。2年の2学期より同級生のいじめが始まり、クラスメートからは無視されるなど、つらい日々が続いたという。いじめは、暴力的なものではなかったが、集団から無視をされるといったような陰険なものであった。6ヶ月間の不登校に陥り、2年生の末に私立中学を辞めて、3年生の1学期に区内の中学校に転校してきたのである。彼の体格はがっつりしているものの、おとなしく気の小さい子どもであった。転校、初日に学校の不良生徒に目をつけ

られ暴力を受けた。そんな彼は、指導員の一人に連れられて道場に入門してきたのである。彼は、道場の仲間とは、簡単に仲良くなれたと語った。15歳から18歳まで在籍。高校を卒業し、都内の国立大学の大学生になった彼は、ボクシング部に所属し4年間を過ごしたと言う。大学を卒業した彼は、現在、弁護士となり趣味のボクシングを続けている。弁護士となった彼は、「強くなることは、理不尽な力や圧力に屈しない力を身に付ける事」と語っていた。彼にとって強さとは不屈の精神だったと考えられる。

③17歳のNは、都内の偏差値の高い私立の中高一貫性の高校に通う子どもであった。体格は良いものの、喧嘩などを一度もしたことがないと言うほどの穏やかな性格であった。彼の母親に聞くところ、彼は、中学3年生の10月頃から高校1年生まで不登校であった。彼が不登校に陥ってしまったのは、表裏の激しいクラスメートが嫌になったというのが原因であった。彼によれば「うわべでは、仲が良さそうに装っているが、本人のいないところでは、陰口を言う」クラスメートが多かったようである。Nは自分自身に直接被害のあるようないじめを受けたわけではないが、嫌がらせをする生徒を見て、学校に行くのが嫌になったというのである。他人が受けている些細ないじめにさえ、気分を悪くしてしまうほど、繊細な子どもであった。入門動機は、「身体的に強くなりたい」というよりも、精神的に強くなりたい」というものであった。

彼は、運動経験もなく、格闘技センスはなく、アマチュアの試合さえも出場することはなかった。また彼は、大人しいタイプで道場の掃除や子どもたちの面倒をよくみる優しい子どもであった。しかし一方で、彼は道場の厳しい練習に黙々と耐えてきた。大人の激しい打ち込み練習¹²⁾にもついていった。17歳から18歳まで在籍。その後、

社会的な弱者をサポートしたいと福祉系の学校に進学し、現在は、不登校児の支援をする仕事をしている。彼にとって強さとは、団太さの獲得であった。今の彼は以前であれば気分が滅入ってしまうような現場で働いているが、こうした現在の彼があるのは「道場などの人間関係で身につけた団太さである」と語っている。

④15歳のOは、裕福な家庭の子どもではなかつた。5人兄弟の次男として育ち、年の離れた弟の面倒を見ていた子どもだった。彼は、中学1年生の後期から不登校であった。中学3年生になり、母親が再婚し転校することになるまで学校に来ることはなかった。格闘技が好きという訳でもないのに、一時期は毎日のように道場に来ていた。練習に参加したり、しなかつたり、その日の気分によってである。暇をつぶしにくるのである。師範によれば、学校に行かない間、道場の掃除に毎日のように来ていたそうである。彼は、自分自身が強くなりたいわけではないのに、道場に通ってきたのである。

現在でも時折、応援しに会場に訪れている。友人の試合が始まると、徹底して応援にまわり、周囲に、大きな声で応援する姿を見せている。彼によれば「闘う友人の姿を見ると元気が出てくる」と言うのである。中学を卒業した彼は、高校には行かずに、弁当屋に勤めた。13歳から14歳まで在籍。彼にとって格闘技は、「やるもの」でなく、「見るもの」であり、苦しい生活の中での気晴らしのようなものであった。

彼にとって強さとは、「友人」の強さであった。しかし、「友人が強くなっていく姿」を見ることが、彼に活力を与えたといえる。不登校で行き場所がない彼にとって、道場は、社会と触れ合える唯一の受け皿であり、社会復帰の場所になったようである。

⑤ 14歳のQは、中学3年生で、他の区から転向して来た子どもであった。筆者の第一印象は、怯えた子どもに見えた。元の学校でいじめに遭っていたらしい。母親の前では、大きな態度でつぱり、不良ぶって見せていたが、強面の先輩達を見た瞬間におどおどしているようだった。本来は、気の弱い子どもであったのである。彼は、転校してきてから、卒業まで一年間道場に通うようになる。しかし、特に格闘技が好きな様子が見られないで、筆者が「格闘技が好きじゃないのか?」と聞いた時、「痛いことは嫌いなので、格闘技は好きじゃないです。」と言ったことがあった。彼が道場に通い続けたのは、道場にいる先輩達と仲良くなつて、道場の外でも自分を守つてもらつたからである。その当時、道場の中には、区の内外で喧嘩の強さで有名な先輩が何人かいた。彼はその先輩たちと仲間でいたかったのである。彼は、14歳から15歳まで在籍した。彼は道場に安心できる人間関係を求めるに同時に周囲の年長者に守られたかったものと思われる。彼にとって強さとは、周りの人間の喧嘩の強さであり、それに守られていると感じることで学校でも安心して生活できるようになったのである。

①～⑤の事例から気性の大人しい子どもたちは、はじめから格闘技が好きであった子どもは少なかつたと見られる。実際、自分自身が強くなるというよりも周りの友人や先輩の肉体的な強さにあこがれ、それを利用することで学校や社会に溶け込めるようになる事例もみられた。それもまたこの道場における強さの捉え方の1つなのである。

しかしながら、強さへのあこがれを気性の荒い子どもと同等にもつ子どももいた。ただし、気性の大人しい子どもたちのいう強さは気性の荒い子どもが肉体的な強さを求めていたのと異なり、精神的な図太さや不屈の精神を指していた子どももいた。師範及び指導員は、気性の大人しい子ど

もの精神を鍛えるために、あえてプロ選手やプロ予備軍にその子たちの“受け手”に回つてもらい、マススパーリングをさせることがあった。気性の大人しい子どもには、「攻撃だけは、思い切りしろ」、「思い切り向かって行け!」「根性見せろ!」「男だろ!」等、荒々しい檄が師範や指導員から飛ばされる。その半面、プロ選手らからの攻撃は、ほとんどなく、弱い子どもたちの攻撃を最大限に引き出そうとしている。誰から見ても、本来の力の10分の1ほどの手加減を加えた攻撃しかプロ選手は出さない。師範は、上級者に「相手の攻撃をすべて受けられないとプロでは通用しない。」と実力の劣る人間との練習意義を諭しながら、上級者の攻撃力を抑えさせることも忘れない。これは、メタコミュニケーションとして、上級者や指導員からの「おもいやり」を伝えていることに他ならない。それらの要素を複合するため、気性の大人しい子ども達も愛情を感じたり、また子どもによっては、師範の期待に応えようとして訓練を積み重ねていき、プロ選手になることもあったのである。

第3節 格闘技の教育的な効果

本章では、道場に居場所を求める子どもたちを中心に参与観察の事例を述べてきた。道場には、学校にはなじめず、暴れたり、いじめられたり、自己の居場所が見つからない子ども達が格闘技を学ぶ中で、立ち直る姿があった。ただもちろん、すべての子が立ち直ったわけではない。そうした子ども達を本論文では、「気性の荒い子どもたち」と「気性の大人しい子どもたち」に分けて、その道場への関わり方を中心に分析・考察した。もちろん、道場を訪れた子どもは多数であり、この2つの分類に完全に分けられるものではないし、全員の事例を挙げることも紙幅が許さなかった。しかし、筆者の指導経験のなかでこの2つの異なるタイプの分類は、重要な意味を持つように思われる。

気性の荒い子どもも、気性の大人しい子どももお互いに対して、道場という場所がなければ、接触を避けたであろうという発言をしていた。しかし、道場においては、お互いが尊重し合うように努める師範の姿が幾度と見られた。そうした師範の試みによって、2つの異なる傾向を持つ子どもたちが、道場の中では互いに共存し、同じ空間で様々に成長したのである。これは師範の人間関係作りが功を奏していたことを示していると考えられる。

2つの異なるタイプにおいて明らかになったことは、特に次の点である。気性の荒い子どもたちは、格闘技が好きで、目立ちたいという自己顕示欲が強い傾向にあり、格闘技選手の中にヒーロー的おもてなし人物像を見出した。彼らは見た目などから、学校で不良少年とレッテルを貼られることもあったが、道場の指導員は、その様な評判には、一切かまわず、格闘技選手として通用するレベルまでの訓練を施していた。道場では学校で注意されるような髪型や服装には拘る必要がなかった。学校では居場所を見出せなかった子どもが、道場では自己の存在を示しやすく、好きな格闘技にもなじみやすかった。気性の荒い子どもたちにとって、それだけでも居心地がよく、なおかつ、強くなる方法を教えてくれる指導者達は、彼らにとって魅力的な大人であり憧れの対象であった。

他方で、気性の大人しい子どもたちは、はじめから格闘技が好きであったわけではなく、格闘技をすることに興味を持てない子どもも少なくなかった。彼らは、おとなしさや弱さから、学校では他の子どもから見下されて、息苦しさを感じていたという。しかし、このような子どもたちも道場に参加する内に、基礎的な格闘技訓練や試合の応援などを通して人間関係を築き、格闘技に馴染み、道場に居場所を見つけていった。道場では、子どもたちは指導者達の細かい目が行き届き守られ、価値を十分に認められていた。こうして、気

性の大人しい子どもにとって道場は安心できる居場所となっていましたのである。気性の大人しい子どもたちは道場の人間から存在を理解され自信を取り戻すことで、学校や社会で活動していくための体力・体格、団太さ、元気、そして安心感を得ることができたのである。

社会復帰という観点から格闘技をみた時、指導者が彼あるいは彼女らが思う“強さ”の捉え方に、喧嘩の強さなど社会的排除につながる危険性を見てとった時には、軌道修正をする。そして、上に挙げたような身体的あるいは精神的な強さを求めるように促すことで、格闘技の教育的な効果があげられることになった。

結 章

現代社会において格差は縮まることなく拡大する一方である。その要因は、政治・教育・経済など多岐に渡るが、そのような状況下のなかで自分の尊厳ある生活を確保できる居場所を、多くの人が失いつつあるように思われる。とりわけ、社会的基盤の弱い子どもたちはその影響を受けやすく、学校の中で自分の居場所を失った時、その子どもも自身が生きていく居場所も失われる可能性があると考えられる。このような子どもたちを、格闘技を通じてどう社会復帰させるかは、格闘技の教育的な効果が試される極めて生々しい現場なのである。

本研究では、格闘技を通じて得られる“強さ”に着目することで格闘技の教育的な効果が検討されたが、その“強さ”も練習をする場所、内容、仲間、師範、支援者などが互いに関係し合うなかで生起するものであった。ある子どもにとって、“強さ”とは、身体的に強く、周囲から一目置かれ喧嘩にも強いということであった。それは、周囲に軽んじて見られなくなることも含んでいる。また、ある子どもにとって、恐怖や苦しい訓練に耐えることで精神的な強さを身に付けることで

もあった。本研究で明確になったことは、身についた技能や訓練が、彼/彼女の自信になり、社会復帰のきっかけとなったことである。子どもがその場所に安心感を持ち、未来への展望を抱くようになる時、はじめて格闘技で得られる“強さ”は教育的な効果を果たし得たと考えられる。

【註】

- 1) ここでいう格闘技道場とは、基本的にはシュートボクシングを教える道場であるが、総合格闘技、ブラジリアン柔術、ムエタイも同時に指導されている。日本武道の道場ではない。
- 2) 阿部によれば相対的貧困とは「貧困であるか否かの判定基準はその人が生きている国、時代、社会によって変化するという考えに基づく」(阿部, 2011, p.64.) という。これに対して絶対的貧困という考え方がある。こちらは、時代や地域、国の違いを超えて、人間が「生存するために必要な栄養量や衣服など生物学的な見地から捉えられる」(阿部, 2011, p.64) 概念である。
- 3) <https://shootboxing.org/about/> 2018年10月1日閲覧
- 4) 元新日本プロレスリング所属、シュートボクシング公式レフリーである。
- 5) この廃校の一部は2004年4月から2014年6月まで貸与された。
- 6) <https://www.fesco.or.jp/winner/h27/winner.php?wid=12177> 2017年9月24日閲覧
- 7) もちろん、運動会や体育祭など縦割りのクラスで行事を行う場合もあるが、それは教育制度上、設定されていることではない。
- 8) スパーリングとは、両者合意の元で、試合と同じ強度で戦う練習方法である。また、スパーリングと類似した練習方法にマススパーリングがある。これは、相手に攻撃を当てずに寸止めする対人練習である。
- 9) A氏は2010年11月20日に死去している。
- 10) <http://shootboxing.org/csr/> 「私達の社会的責任とは」 2017年7月16日閲覧。
- 11) 2009年5月6日放送の「約束の力」(NHK), スーパーモーニング(テレビ朝日)。
- 12) 打ち込み練習は、身体の大きな大人が子どもたちに自らの胸部を殴らせる練習である。

【引用参考文献】

〈日本語文献〉

- 阿比留久美 (2012) 『『居場所』の批判的検討』『若者の居場所と参加』, 東洋館出版社。
- 阿部彩 (2011) 『弱者の居場所がない社会』, 講談社。
- 池本淳一 (2009) 『スポーツと社会階層—ボクシングと中国武術を手がかりに—』, 大阪大学学位申請論文。
- 石岡丈昇 (2012) 『ローカルボクサーと貧困世界—マニラのボクシングジムにみる身体文化—』, 世界思想社。
- クリフォード・ギアーツ〔吉田禎吾・中牧弘允・柳川啓一・板橋作美訳〕 (1987) 『文化の解釈学 I』, 岩波書店。
- (Clifford Geertz. (1973) *The Interpretation of Cultures*, New York: Basic Books.)
- ジーン・レイブ&エティエンヌ・ウェンガー〔福島真人・佐伯胖訳〕 (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』, 産業図書 (J, Lave, & Etienne, Wenger. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press.)
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学』, セリカ書房。
- 笛井宏益 (2011) 『学校・家庭・地域住民の連携協力の基本原理にかかる考察』『学校・家庭・地域の連携と社会教育』, 東洋館出版社。

- 新堀道也 (1981) 『社会教育学〔現代教育学-11〕』, 東信堂。

- 田中治彦 (2012) 『若者の居場所とユースワーク』『若者の居場所と参加』, 東洋館出版社。

- 田中雅文 (2011) 『学校支援が社会教育に及ぼす影響』『学校・家庭・地域の連携と社会教育』, 東洋館出版社。

- 菱田慶文 (2014) 『ムエタイの世界～ギャンブル化変容の体験的考察～』, めこん。

〈英語文献〉

- Sugden, John., (1996) *Boxing and Society: An International Analysis*, Manchester: Manchester Univ Pr.

- Wacquant, L., (2004) *Body & Soul: Notebooks of an Apprentice Boxer*, Oxford: Oxford University Press.

- Weinberg, S. K. & Around, H. (1952) THE OCCUPATIONAL CULTURE OF THE BOXER, *American Journal of Sociology*, 57(5): 460-469.